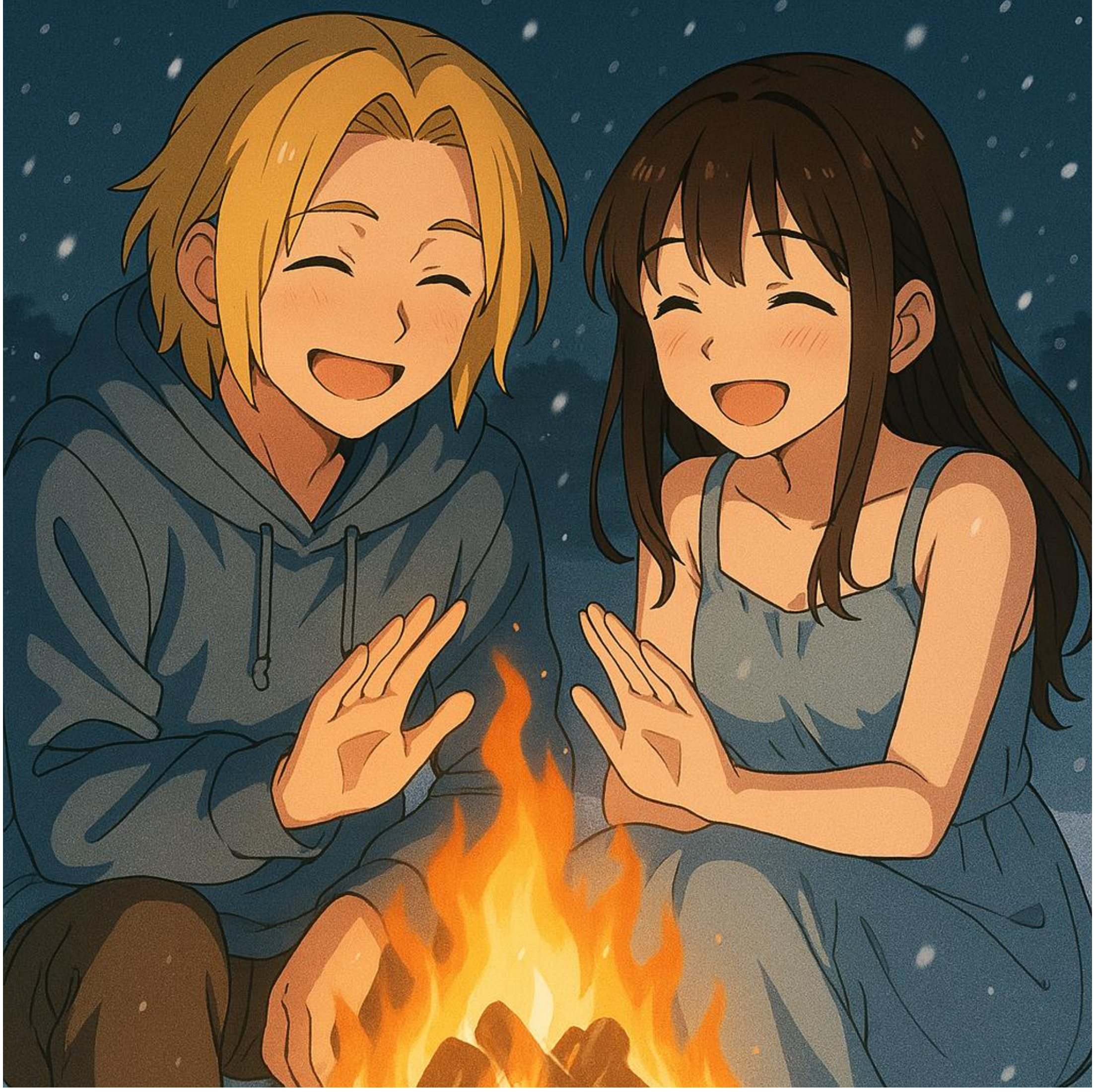
風と雪

collections

和泉敏之　和泉ゆき



物語　雪の少女

和泉敏之

プロローグ

1994 年 12 月 23 日、1 人の赤ん坊が教会の前に捨てられていた。赤ん坊の横には「ユキ誰かこの子をお願いします」とだけ書かれてある手紙が残されていた。

赤ん坊は 1 人の老人によって発見された。この老人の名前はマルク。マルク団というマフィアの団長だ。マルク団は多くの奴隷を手にしていた。子どもたちを奴隷として育て、やがて高値で売るという商売をしていた。マルクは思った。この赤ん坊も奴隷として育てようと。

2001 年 8 月、赤ん坊は 6 歳になっていた。手紙にしたがって「ユキ」という名前がつけられたこの少女はマルク団で奴隷として生活をするようになる。

マルク団の奴隷の子どもたちは、高値で売られるように教育を受ける。1 つの教室で授業を受け、さまざまな生活をしながら、奴隷として雑用もさせられる。わずかの休憩時間以外はほとんど勉強と仕事を強制的に行わなければならない。

ユキもその 1 人だった。しかし、問題点があった。ユキは生まれつき文字が読めない。これが小さなころに分かり、マルクはユキを病院に連れて行ったことがあるが、脳に異常はないようだった。

さらに問題があった。ユキは文字が読めないことを理由に、他の奴隷たちからいじめを受けていた。他の奴隷たちはユキに雑用を押し付け、本人たちは楽をしていた。

本当の問題はここからだ。ユキが 5 歳のとき、ユキは他の奴隷からいじめを受けて頭を殴られ、号泣した。すると、涙が雪に固まっていったのだ。水滴が一瞬で凍りつき、雪へと変わった。これを見たほかの奴隷たちはユキの涙を見たくなって、頻繁にユキをいじめ、泣かせようとした。

現在も、それは変わっていない。ユキは他の奴隷たちからいじめられ、しばしば涙を流す。その涙が雪に変わるのを見るのは、他の奴隷たちの好奇心を大いに刺激した。

マルク団の教育者たちもユキに冷たく接した。ユキは文字が読めず、他の奴隷の教育への遅れを生み出すことから、ユキに体罰をする。ユキはただそれに絶えるしかなかった。

ユキは特に男性教官のムチで叩かれることを恐れていた。あの痛みは尋常ではない。毎時間、毎日、毎年ユキは耐えるしかなかった。

ユキは人一倍臆病になり、笑顔も見せなくなった。1 日の中で泣いている時間のほうが長いというくらいになっていた。

マルク団の奴隷たちは 2 人 1 組で眠る。部屋を与えられ、二段ベッドで眠る。ユキは 3

歳年上の少女の奴隷と一緒に部屋を共にしていた。この少女が特にユキに冷たく、そしていじめを率先的に行う人物だった。
　ある日、奴隷たちが一同に介して、食堂で食事を行っていた。この少女はユキに紙をつきだす。「読んでみな！」少女が笑いながら強い口調で言う。ユキはしどろもどろしていた。もちろん読めることなどできない。少女は言った。「『死ね』って書いてあんの！」そう言って少女は高笑いを始めた。他の奴隷たちも笑い出す。ユキはその場でしゃがみこむしかできなかった。目には大粒の涙をためていた。涙は雪に変わっていた。

サニー

2005 年 5 月 4 日の朝だった。マルク団に新しい奴隷が入ってくることが分かった。ユキは 10 歳になっていた。ユキに対する他の奴隷からのいじめと教官たちからの体罰は続いていた。早く奴隷から解放されたい。どこでもいいから売り飛ばされたい。そう思いながら、ユキは感情を殺した生活を送っていた。新しく入った奴隷は 7 歳の少女だった。
　マルク団の幹部がユキを呼び止めた。「お前と同じ部屋だ。いいか？　きちんと奴隷として、お前があのガキを育てるんだ。あの新しい奴隷が有用な人材にならなかったらお前のせいだからな」前にいたユキをいじめてくる同じ部屋の少女は最近、売られたばかりだった。ユキは自分の重荷が増えたと思った。きっとあの新しい奴隷も、周りの奴隷たちになびいて、自分をいじめてくるだろう。年下だろうが年上だろうが関係ない。ユキはほとんどあきらめていた。
　幹部の言われるままに、ユキと新しい奴隷が部屋に入っていった。新しい奴隷は肌の色は黒いが、凍りついたような顔をしている。「ユキ、お前は上のベッドだ。それからお前は下だ」そう言って、幹部は出て行った。ユキと新しい奴隷は 2 人きりになった。ユキは恐る恐る話しかけた。「あの……あなた、名前は？」しかし反応がない。新しい奴隷はベッドに背を向けて、座り込んだ。目に力がない。ユキは人の死を見たことはないが、これこそが死んだ人の顔だろうと思った。奴隷はそのまま顔を下げて、動かなくなった。

　しばらくして、ユキは授業に出た。新しい奴隷は慣れるまで、部屋で待機となった。例のムチを使う男性教官が怒鳴りつける。「お前、これ読んでみろ！」ユキは 10 歳の「普通」の子どもが読む教材を渡された。ユキは起立をさせられ、黙り込んでいた。「お前いつになったらマシになるんだ？　これは？」そう言って教官は 5 歳児の子どもが読む教材をユキに投げつけた。ユキはそれを手に取ったが、読めない。黙り込んでいた。そこへ教官のムチが飛んだ。
　ユキは何度も何度もムチで殴られた。教官は「お前みたいな奴はどこにも売れない！

お前など死んでしまえ！　有用な人材でなければ、奴隷としては無価値だ。お前など生きている価値はない」そう叫びながら、教官はムチでユキを殴り続けた。ユキは、ハアハア息をしながら、その場で倒れるしかできなかった。「お前など外で立ってろ！　いいか、逃げるなよ？　脱走したら見つけ出して、殺されるルールを忘れるなよ？」教官にそう言われたユキは精一杯の力で立ち上がって、建物の外へ出ようとした。「おい、誰が靴を履いていいと言った？　お前など裸足でいろ！」そう言って教官はユキの靴を無理やり脱がせた。ユキは転んで、倒れた。他の奴隷たちはその一部始終を笑いながら見ていた。「死ねばいいのに」そういう声も聞こえてきた。ユキは無表情で建物の外へ出た。

　ユキは外で座っていた。夜になって、ようやく建物の中に入ることが許された。ユキは食事もせず、部屋へ帰ってきた。すると、あの新しい奴隷が、朝見た姿とまったく同じ格好で座っていた。ベッドに背中をもたれさせて、顔を下に下げたままだった。
　ユキはいつの間にか靴を履いていた。ユキは上のベッドに行こうとした。新しい奴隷のことが気がかりだった。「あの……私、先に寝るから、寝るときはいつでも明かりを消して寝てね……」そう静かに言って、ユキは眠りにつこうとした。新しい奴隷は何も言わなかった。それに少しがっかりしたまま、ユキは布団の中に倒れ込んだ。眠れない。身体中が痛い。
　数時間経っても、ユキは眠れなかった。ベッドの下を見た。新しい奴隷は同じ姿のままだった。ユキは気になったが、それにどう対処していいか術を知らなかった。すると、新しい奴隷は急に泣き始めた。泣くというより、避けんでいるようだった。新しい奴隷の泣き叫ぶ声が部屋中をかけめぐった。
　ユキは驚いていた。どうしていいか分からなかったが、ベッドから降りて、その新しい奴隷を抱きしめた。新しい奴隷はユキに抱かれたまま、泣き叫んだ。こうして夜が明けた。

2005 年 5 月 5 日、ユキが幹部に呼び出された。外は雨が降っていた。どしゃぶりの雨だった。「昨日の叫び声はなんだ？」幹部のことばにユキは戸惑った。「あれは私です……身体が痛くて……」幹部の平手打ちがユキの頬に走った。幹部はユキに怒声を浴びせた。「罰として建物を全部掃除しろ！　合格点が出るまで寝るな！」ユキは従うしかなかった。
　ユキは自分の頭が熱いことに気づいた。どうやら熱があるらしい。しかし、どうにかすることはできない。マルク団に保険医のような存在はいない。よほどの重病でなければ病院にも連れて行ってもらえない。そのまま病気に気づかず、亡くなる奴隷もいるという噂もあった。奴隷が亡くなっても、それは他の奴隷には伝えられないため、噂は本当かは分からない。
　ユキは前庭をどしゃぶりの雨の中、掃除をしていた。身体が重い。（私、生きてる意味あるのかな……）ユキはそう思って、フラフラになりながら、掃除をした。しかし力が尽き

た。ユキはその場で倒れた。（ああ……このまま私、死ぬんだ……）ユキの頭には今までの記憶が走馬灯のようによみがえっていた。しかし、他の奴隷にいじめられる記憶や教官に殴られる記憶しかない。（つらかったな……もう楽になれるよね……）ユキは涙を流しながら、雨の叩きつける中、倒れていた。

ユキは授業で昔学んだことを思い出していた。（死んだら天国か地獄へ行くんだっけ……天国へいけた人は幸せになれるけど、悪いことして地獄へ落ちたら、この世では味わえない苦しみを味わうんだよね……それで地獄に行った人は生まれ変わるか、消えてなくなるんだっけ……最初からいなかったことになるんだ……私もそうなりたいな……）ユキは涙を流しながら、倒れていた。そのまま気を失った。

ユキが目を開けると、部屋のベッドにいた。（うん……？ここが天国？　地獄？）起き上がると、あの新しい奴隷の顔があった。「よかった！　目が覚めたんだね！　びっくりしたよ！　外に出たら、倒れてるだもん！」新しい奴隷は今まで見せなかった笑顔でユキにそう言った。「あなたが……助けてくれたの……？」ユキがそう言うと、新しい奴隷は頷いた。

ユキは何が起こったのかよく分からなかった。ただ、前庭で倒れていたのを、この新しい奴隷が救ってくれたことだと理解した。新しい奴隷は笑顔のまま言った。「私、サニー！あなたはユキね！　同じ部屋の女の子がユキっていう名前だっていうのは聞いてたの！」サニーという少女は、他の奴隷とは違う優しい雰囲気を持った子だった。ユキはしばらく下を見つめ、言った。「……ありがとう……」サニーは笑っていた。

ユキとサニーは１段目のベッドに背をかけ、座った。サニーは笑顔でユキのことを見ている。サニーが唐突に言った。「あなた、文字が読めないんでしょ？」ユキは身構えた。サニーから目を背け、下を向いた。「いいよ！　文字が読めなくたって！」サニーのそのことばにユキは不意をつかれたようだった。これまで文字が読めないことをバカにしてくる人間にしか出会ったことがなかった。サニーの真意を確かめようとしたが、サニーは純粋にそう言っているのが表情から分かった。ユキは「……ありがとう……」と静かに言った。

２人はしばらく話をした。ユキは自分のことを話した。自分が捨てられていて、幼いころから、マルク団の奴隷だということ。他の奴隷からいじめられていること。教官から体罰を受けていること。ユキがここまで自分のことを他の人に話せるのは初めてだった。そのくらい、サニーには安心して話すことができた。

サニーはうんうんと聞いていた。サニーも自分のことを語ってくれた。「私も街で捨てられてたの！　　　小さな島にある村に引き取ってもらったの！　楽しかった。村の人たち、みんな優しくて……でも、マルク団が襲ってきて……」サニーは目に涙を浮かべていた。「私、村に好きな子がいたの……将来、お嫁さんにしてって言ったこともある……その

子は……生きてるか分からない……私、その子を探したい……」サニーの目から涙がこぼれた。ユキはサニーの涙をぬぐった。

ユキは静かに言った。「私、間違ってた……今まで自分がこの世で一番不幸だと思ってたの……でももっとつらい思いしてる人いるんだね……」サニーは首を横に振った。涙交じりの声で「ユキのほうがかわいそう……」と言った。ユキは涙をこらえていたが、とうとう涙が出た。

涙は雪に変わった。サニーがそれを見つめた。ユキはまずいと思った。サニーは地面に解けた雪に手をやった。サニーはしばらくして笑い始めた。ユキは救われた気がした。自分の雪に変わる涙を見ても動じない。サニーが言った。「その好きな子……ユキにちょっと似てる……」ユキはただ涙を浮かべながら、聞いた。「ユキ、自分にあんまり自信がないでしょ？　泣き虫だろうし……そういうところ、あの子に似てる……」ユキは涙を 1 粒落として笑った。否定はせず、ただ笑った。サニーが雪の手を握り締めて言った。「ユキ、ユキはユキなんだから、負けちゃだめだよ！　誰がなんと言おうとユキはユキなんだから！　……本当は私、死のうと思ってたの……でも、ユキに抱きしめられて、なんか温かくて……生きようって決めたの！」2 人は涙を流しながら、抱きしめあった。ユキは思った。この世で初めて味方ができたと。

幸せになって

ユキはそれから強くなった。他の奴隷からのいじめや教官の暴力は続いたが、自分を認めてくれる存在ができたことにより、負けないと思うようになった。

ユキはサニーに言っていた。自分がいじめられていても、それを止めないでほしいと。ユキはサニーまで標的にされることを恐れた。サニーは「いやだ！」と言ったが、ユキは必死に頼んだ。ユキの本気の目にサニーはしぶしぶ頷いた。

しかし、それでもユキはよかった。サニーという存在がいるだけで、生きているという意味があると思った。ユキが他の奴隷にいじめられているとき、サニーはただ黙って見ているだけだったのを見て、ユキは逆に安心した。

2006 年 2 月の夜、部屋でユキとサニーは話をしていた。いつものように。この時間がユキには一番幸福で安心できる時間だった。しかし、今日はサニーは少し険しい顔をしていた。サニーが急にユキに怒鳴りつけた。「ユキ！　何も言わないのは優しさとは違うよ！」サニーにそう言われたユキは驚いて、サニーを見つめた。サニーは少し微笑んで言った。「ごめんね、ユキ……でも、私はユキには本当に優しい人になってほしいの……ユキは優しさの分かる人だから……」ユキはしばらく黙り込んだ。しかし、自分のことを思ってくれているサニーの思いやりが分かっていた。「うん……ちょっとずつ……やってみるよ……ありがとう！　サニー！」ユキが笑顔でそう言うと、サニーも笑った。

2006 年 3 月 11 日、部屋でサニーが自分のことを語っていた。「私が好きな人の名前はレイニーって言うの！　優しくて、でも泣き虫で……ユキにそっくりなんだよ！」ユキは笑いながら聞いていた。サニーが自分のことを話してくれるのはユキにとって、これ以上にない喜びだった。

サニーは急にまじめな顔になった。「笑わないで聞いてくれる？」ユキもまじめな目をして頷いた。「そのレイニーっていう子は勇者の生まれ変わりなの……私を育ててくれた人が言ってた。その子の命を奪うために、マルク団は私の村を襲ったの……」ユキは理解できなかった。しかし、サニーが冗談を言っているとはとても思えなかった。サニーがユキに教えた。伝説上の話だが、大昔、まだこの世が今の形をしていないときに、魔王という邪悪な存在が現れ、この世を滅亡させた。その魔王を倒すために、火の勇者、水の勇者、風の勇者、土の勇者が現れ、魔王を封じ込めたという……。サニーの幼馴染のレイニーという少年はその風の勇者の生まれ変わりらしい。ユキは驚嘆していたが、サニーの言うことを信じることにした。「私、レイニーを探す！　絶対、生きてる！」サニーがそう言うと、ユキも笑顔で頷いた。「いつか、私とレイニーとユキで遊びたいね！」サニーのことばに、ユキは再び笑った。

2006 年 4 月 1 日がやってきた。この日、マルク団の団員たちが奴隷たちの建物を視察することになっていた。ユキは長年、マルク団にいるが、これは初めてのことだった。マフィアたちが一同にこの場所にやってくる。ユキは怖がっていた。しかし、サニーが言った。「大丈夫！　私たち、奴隷だもん！　いつか売られるんだから、私たちの命を奪ったりはしないって！」ユキは納得して、笑った。

ユキはその日、マルク団の団員たちに次々と会った。みな、恐ろしい表所をしている。奴隷たちの指導役の幹部たちが善人に見えるほど、みな人間ではない顔をしているようだった。

少年もいた。（子どもの団員もいるんだ……）ユキはただ団員たちに会釈をして、何事も起きぬようにと願い続けた。すると、1 人の少年がユキの前にやってきた。少年はユキの手をひっぱり、近くの部屋へ強引にひっぱった。ユキは何が起こったのかわからないでいた。少年は言った。「お前がユキだな？」ユキは黙っていた。少年はユキの頬を叩いた。ユキはその場に倒れこんだ。「答えろ！　お前がユキだろう？」ユキは何も言わず、頷いた。

ジャックは高笑い　少年は言った。「お前、俺の女になれ！」ユキは何を言われているか分からずにただ倒れたまま、黙っていた。「お前、自分のこと何も知らないだろう？」ユキは倒れたまま声を出した。「何言ってるの？　あなたは誰……？」少年は高笑いを始めた。「俺の名前はジャック。マルクの孫だ！」ユキはただ聴くしかできなかった。「じいちゃんから色々聞いてるんだよ！　お前は俺の女にならなきゃいけないんだ！」ユキはサニーに言われたことを思い出した。……何も言わないのは優しさとは違うよ……ユキは人生

で初めてとも言える大声を出して言った。「なんであんたなんかと！」ユキは部屋から出ようとした。ジャックがそれを止めた。「お前、自分が何様か分かってるのか？」そう言いながら、ジャックはユキを叩いた。倒れこむユキの腹にジャックは蹴りを入れた。ユキは咳こんだ。

ジャックはそれから急にまじめな顔になって言った。「お前は魔王の生まれ変わりなんだよ……」ユキは何を言われているか理解できなかった。ジャックは冷静そうだったが、それが逆に不気味だった。ジャックが続けた。「伝説の勇者の話を知らないのか？　あのとき、殺された魔王の生まれ変わりがお前なんだよ！　お前の親はそれを知って、お前を捨てたのさ！」ユキは叫んだ。「違う！　私は魔王なんかじゃない！　私は……」そう言ったユキの目には涙があふれていた。涙は雪に変わった。ジャックがにやりと笑って言った。「それだよ！　涙が雪に変わるのが、魔王の生まれ変わりの証拠だ！　よく聞けよ！伝説の魔王は涙を流すと、血に変わってたんだよ！　その魔王が殺されて、地獄へ行った。そこで生まれ変わることになった。今度は悪の魔王じゃなくて、善の塊として生まれ変わらそうってことになったんだ！　魔王は善に満ちた人間として生まれ変わったが、涙が変容することだけは変わらなかった。それで涙が雪に変わるんだよ！」

ユキは涙を流して、ジャックをにらんだ。「お前、文字も読めないだろう？　そりゃそうさ！　魔王の時代にはまだ文字なんてなかったんだからな！」ユキは次々と自分のことを言い当てられることに、ただ悔しさの涙を流した。「お前の親がある日、マルク団を訪れて、言ったのさ！　お前をやっぱり帰してほしいってな！　バカだよな！　自分で捨てたくせに返してほしいだってよ！　そのときに、お前の親が娘は魔王の生まれ変わりだって言ったんだ！」

ユキは自信がなくなっていた。もしかすると、このジャックという少年が言っていることは本当かもしれない。しかし、認めたくなかった。「マルク団は喜んださ！　いずれお前に封じ込められている悪のパワーを蘇らせて、この世を支配するって決めたんだ！」そう言ってジャックはユキの腹をもう１蹴りした。

そこへサニーがかけつけた。「何してんの！？」サニーはジャックを突き飛ばした。サニーがユキに駆け寄り「大丈夫？」と叫んだ。ユキは意識が朦朧としながら、サニーに身をゆだねた。ジャックがサニーを殴りつけた。サニーは倒れこんだ。ジャックは「このガキ！」と叫びながら、サニーを殴り続けた。ユキは戸棚の中にナイフがあるのに気づいた。それを取り出して、ユキは自分の首にナイフを突きつけた。「やめないと……私、死ぬよ……」ユキはサニーを守ろうと必死だった。目に大粒の涙をためて、ジャックをにらんだ。ジャックは不敵な笑みを浮かべた。ジャックが手を前にかざすと、ユキの手からナイフが離れた。ナイフはそのまま浮かびながら、やがてジャックの手に渡った。

ジャックはそのナイフでサニーの腹を突き刺した。一瞬の出来事だった。ユキはただそれを眺めるしかできなかった。ジャックの携帯電話が鳴った。「ちっ戻ってこいってか……まあ、これ以上犠牲者を増やしたくなかったら、俺の言うことを聞くんだな……」そう言

って、ジャックは部屋を後にした。
　ユキはサニーに駆け寄った。「サニー……ごめん……私のせいで……誰か呼んでくるから！」そう言って立ち上がろうとしたユキの手をサニーが止めた。ユキは混乱していた。サニーが小さな声で言った。「私はもうだめ……ユキ、私の言うことをよく聞いて……ユキはここから出るの……マルク団から出るの……このままだとユキもいつか殺されちゃう……」ユキは涙を流しながら、しゃがみこんでサニーを見つめた。サニーが小さな声でつぶやいた。「私の代わりにレイニーを探して……レイニーに伝えてほしいことがあるの……」ユキは泣きながら頷いた。サニーがつぶやいた。「レイニーに伝えて……幸せになって……って……」ユキの目から大粒の涙が零れ落ち、雪に変わった。「私にはできなかったけど、レイニーを幸せにしてくれる人は絶対現れるから……その人と……」サニーは咳をして血を吐いた。ユキは涙声で言った。「もうしゃべらなくていいから……伝えるよ、約束する……」ユキがそう言うと、サニーは安心したように、笑顔になった。「ユキ……泣かないで……ユキはあんまり笑わないけど、ユキの笑顔は人を幸せにする力があるんだよ……私、ユキにいっぱい元気もらったよ……」ユキはそう言われると、涙を浮かべたまま微笑を見せた。「ユキ……大好きだよ……レイニーによろしくね……」そう言うと、サニーＪは目を閉じて、動かなくなった。部屋にユキの泣き叫ぶ声が響いた。

レイニー

　サニーの死はユキに責任を負わせることであっさりと解決された。ユキは何も言わなかった。自分がサニーを殺したのも同然と思っていた。
　ユキは罪滅ぼしのために、サニーとの約束を守ることにした。2006年5月1日、ユキはマルク団を脱走した。外へ出されている間に、マルク団から離れた。
　ユキは近くの街に行き、警察を訪れた。警察にこれまでの事情を話した。すぐに警察が乗り出し、2006年5月2日、マルク団と警察が激突し、マルク団は倒れた。マルク団の関係者はすべて逮捕され、奴隷たちは解放された。ユキはこれまで売られた奴隷たちがどうして警察に訴え出なかったのか憎んだ。そうすれば、サニーも死なずにすんだのにと考えた。

　2006年7月、ユキは自分が捨てられていた教会を警察に調べてもらい、そこを訪れた。教会の門でユキは立ち止まった。教会には誰も住んでいなかった。（ここから再出発するんだ……サニー、見守っててね……）ユキが教会の門を開けると、1人の少女が祈っていた。名前はクレアというらしい。クレアは元気な少女で、ユキと同い年だった。親はこの世におらず、近くの養護施設に住んでいるらしい。自分と近い境遇にあるクレアとユキはすぐに仲良くなった。

ユキはこれまでのことをクレアに話した。「ふ〜ん、それじゃユキはそのレイニーって子を探すんだね？」クレアはユキの言うことを素直に聞き、ユキを受け入れた。ユキは言った。「生きてるかどうかも分からないけど……」落ち込んでいるユキにクレアは大笑いをしながら言った。「大丈夫！　生きてるって！　そのレイニーって子もサニーちゃんのことを探してると思うよ！」ユキは少し微笑み、言った。「私がサニーを殺したってことも言わないと……」クレアはそれまでの笑い顔から急に怒った表情になって言った。「ユキが殺したんじゃないの！　そのジャックって奴でしょ！　まあ、あなたが魔王だとか、そういうことはよくわかんないけどさ！」ユキは少し安心した。自分が魔王の生まれ変わりだと言っても動じないクレアの度量に感動していた。

ユキは花売りをしながら、生計を立てることにした。2006 年 7 月 20 日、ユキが花を売っていると、大人の男性が近づいてきた。急にユキを突き飛ばした。「おい！　ここで物を売るなって掲示板に書いてるだろう？　これ見えないのか？」ユキは男性が指差した紙を見つめた。「俺らの商売を考えろ、バカ！」ユキは謝罪をし、その場を後にした。しかし、ユキは負けなかった。ユキはサニーに泣かないでと言われたことを思い出し、涙を他人に見せないようにと決めていた。

月日が流れた。ユキはレイニーという人間を探し続けた。その間、ユキはいくつか魔法を覚えた。花売りをしながら、客と対話をし、魔法を使える人間たちとの交流を持った。魔法は大昔の人間なら誰でも使えたが、現在は科学の発展により、魔法の有効性が薄れてしまっている。魔法オ使う人口も減ってきている。ユキは回復の魔法をはじめ、いくつか魔法を覚えた。文字の読めないユキは、代わりに魔法を操る能力が長けているようだった。

ユキは過去の泣き虫で臆病な性格とは別れを告げていた。サニーとの約束を守り、笑顔を忘れないようにした。クレアの明るい性格に影響されて、ユキの性格も明るくなった。過去のユキが現在のユキを見たら、別人だと思うに違いない。ユキは明るく好奇心旺盛な天真爛漫な性格に変わっていた。いつもユキには笑顔の花が咲いていた。

ユキは白い服をいつも着ていた。どういうわけかいつも裸足だった。クレアが靴を買ってきても、ユキはそれを教会の部屋の棚にしまってしまった。クレアもどうしてユキがいつも裸足なのかだけは分からずにいた。

2013 年 12 月、ユキはレイニーの手がかりをつかんだ。レイニーという人間は生きている。そして、ユキたちの住む街にあるヘゲル団というマフィアの中にいることを知った。ヘゲル団の中で最年少で幹部試験に合格した青年が、サニーに聞いた境遇と似た過去を持っていることを突き止めた。ユキはマルク団での出来事がトラウマになり、マフィアを心底恐れていた。しかし、2014 年 4 月 1 日、サニーの命日にユキの夢の中にサニーが現れた。サニーはただ笑っていた。ユキは怖がらずに前を向こうと決めた。そして、レイニーという青年とどうにかして接触できないか、機会をうかがい続けた。

2015年10月6日、その機会がやってきた。街はヘゲル団と別のマフィアの抗争で騒がしくなった。ユキは現地にかけつけた。クレアと一緒に巻き込まれた怪我をした人間たちの看病をしていた。そのとき声が聞こえた。「レイニー、来い！」ユキがその声の方を見ると、自分と同い年くらいの青年が立っていた。青年はすぐに見えなくなったが、この青年がレイニーだと確信した。

ユキは必死で追いかけ、その青年が怪我をして倒れているところを見つけた。青年が目を覚ました。ユキが名前を聞くと、「レイニー」と言った。ユキは笑った。（やっと見つけた！）サニーは笑った。

笑って

ユキはレイニーを教会へ連れて行った。レイニーは冷たい表情を浮かべる人間だった。レイニーは腕にけがをしていた。ユキがレイニーの前に行ったとき、レイニーは気絶をしていた。ユキはレイニーの腕に包帯を巻いた。

レイニーは陰鬱な雰囲気を持つ男だった。レイニーの右側の腰にはムチが取り付けられいた。ユキはこの人が本当にサニーの言っていた人物なのか自信がなかった。ユキが知っているレイニーとは、泣き虫だが優しい少年というイメージを持つ人間だった。今ユキが目の前にしている男からはそのような印象は見えてこなかった。

ユキは笑顔で聞いた。「あなた、本当はマフィアなんてやりたくないんじゃないの？」レイニーは凍り付くような冷たい目でユキをにらむだけだった。「あなたの家はどこ？」ユキは再び笑顔で聞いた。レイニーはやはりユキをにらみつけるだけだった。

しばらく沈黙が訪れた。ユキは考えた。（怖いな……この人がサニーの言ってた人じゃなくて、ただのマフィアだったらどうしよう……）ユキは何か言おうとしたが、ことばが見つからなかった。

ユキは笑顔を作り直して、また聞いた。「あなたのこと、もっと知りたいの！　あなた、どんな子供だった？」自分でも唐突だと思ったが、ユキはただ無邪気に聞いた。するとレイニーの顔が歪み、ぽつりとつぶやいた。「嫌いだ……」「え？」ユキが聞き返した。しばらく沈黙が襲った後、レイニーが言った。「お前みたいな人の過去のことをほじくろうとする奴は嫌いだ……」ユキは黙ってしまった。しかし、何とかこの男がサニーの言っていたレイニーかどうか聞き出したかった。

ユキはただ笑顔でレイニーを見つめていた。レイニーはそれに答えるように、鋭い目つきでユキをにらんでいた。ユキは目をそらすと、この男がどこかに行ってしまいそうで、ただ見つめ続けた。

レイニーが下を向いた。その直後、大声で叫んだ。「お前なんか大嫌いだ！　俺はあそこで死ぬつもりだったんだ！　俺は生まれてこなきゃよかったんだ！　お前が助けなきゃ、俺は……」言い終わる前に、ユキの平手打ちがレイニーの頬に飛んでいた。

レイニーは叩かれた方向を向いたまま、動かなかった。ユキはハラハラしながら言った。「簡単に死ぬとか言わないで。生きたくたって生きられない人だっているんだよ。命を粗末にしないで……」ユキは心臓がどきどきするのを感じていた。

再び沈黙が訪れた。レイニーは顔を戻して、下を向いた。ユキは頭を降ろした。「……ごめんなさい。人のこと、叩くなんて最低だよね……私のことも叩いて……」ユキのその言葉を聞き、レイニーは手をかざした。ユキは叩かれるのを覚悟して目をつぶった。

すると、レイニーは拳を握り、軽くユキの頭を叩いた。叩くというより、触るような感じだった。

ユキは予想外の展開にとまどいながらレイニーを見た。レイニーの口元が少しゆるみ、微笑みが見えた。「やっと笑ってくれたね！」ユキも満面の笑顔でそう言った。

レイニーの目が穏やかになったのをユキは感じた。レイニーは話し始めた。「お前……いや、ユキだったな……ユキは俺の昔の知り合いに似ている……」ユキは興味を持った。「どんな人なの？」ユキは笑顔のまま聞いた。「俺は昔村で住んでいた。小さな島にある村だ。そこにいた幼馴染と似ている……」レイニーは少しずつ口からことばを放ち始めた。

ユキは覚悟を決めた。そして一呼吸をして言った。「その子の名前はサニー？」レイニーは驚愕に満ちた顔をしている。ユキはレイニーの心の中が読めたように感じた。（どうして知っている？）

レイニーは驚いた表情のまま言った。「サニーのこと……知ってるのか？」ユキは小さく頷いた。そして言った。「私がサニーを殺したの……」レイニーの目が少し開いたのが分かった。

ユキの頭は混乱していた。ユキは自分の罪をレイニーに告げることで必死だった。「それだけじゃない……私は……魔王の生まれ変わりなの……あなたの敵なの……あなたが本当の敵は私なの……」ユキは次のことばを探していた。そのことばが見つかる前に、レイニーは歩き出し、教会から出て行った。門を出る前にレイニーは何かつぶやいたが、声が小さすぎて、ユキは聞き取れなかった。ユキは教会の外を見たが、レイニーはいなくなっていた。

ユキは考えた。（だめだ……私、昔から何も変わってない……臆病のままだ……）ユキはサニーからレイニーに伝えてほしいと言われたことをほとんど伝えきれずに、レイニーを逃してしまった。ユキは教会の中でただ 1 人反省をするだけだった。

2015 年 11 月 3 日、ユキは教会の前にある花壇に水をやっていた。するとそこへレイニーがやってきた。レイニーは本を 3 冊ほど持っていた。ユキは突然の予期せぬ出来事に困惑したが、少し嬉しかった。「入る？」ユキがそう言うと、レイニーは小さく頷き、教会

の中へ入っていった。
　ユキは戸惑っていたが、笑顔を作り、レイニーと向き合った。沈黙を破ったのはレイニーだった。「魔王を復活させようとしている奴がいる。そいつはお前……ユキの中にある悪のパワーを掘り起こして、邪悪な存在にしようとしている。魔王の復活のさせ方がこの本に書かれてある。読んでみろ」
　そう言ってレイニーは本の真ん中のあたりのページを開いて、ユキに手渡した。ユキはしばらく本を見つめながら黙っていた。ユキは黙り込み、本を眺めた。そして、何も言わずに本を閉じた。
　レイニーは困惑していた。ユキが告げた。「ごめんね……私、文字が読めないの」レイニーの顔に困惑の表情が強まった。しばらく沈黙が流れた後、レイニーが再び先ほどのページを開いて、語り始めた。「この本に書かれてあるのは……魔王の生まれ変わりの人間に『邪悪なる光の石』という石を持たせると、その人間に邪悪なるパワーが溢れてくるってことだ……しばらく時間が経った後、その人間は人間でなくなる……つまり、魔王が復活するんだ……」レイニーはそう言うと黙り込んだ。
　ユキは笑っていた。小さな声で言った。「ありがと……」レイニーは悲しそうな表情を浮かべていた。「本は嫌いか……？」レイニーは小さな声で尋ねた。ユキは笑顔のまま答えた。「世の中には本が好きな人も嫌いな人もいるけど……私はそのどっちの資格もない」ユキは笑ってレイニーの目を見た。レイニーの目は優しそうだった。鋭い目をしているが、どこか怯えているような目をしていた。そのコントラストから、ユキはレイニーが本当は純粋な人間だが、育ってきた環境で冷たい態度をとらざるを得なくなったことを感じ取った。ただ不器用な人間のようにも思えた。
　レイニーは持っていた別の本を取り出した。「好きか嫌いかは読んでみてからじゃないとわからないだろう……」そう言って、レイニーは本を朗読し始めた。伝説の勇者についての本だった。しばらく読んで、レイニーははっとしたようだった。「ごめん……急にこんなことされて、迷惑だったな……」ユキはそのことばを聞くと、これまでより笑顔のエネルギーを強めた。
　ユキは満面の笑顔で言った。「読んで！」ユキのその無邪気な笑顔に負けたレイニーは本の朗読を再開した。
　しばらくレイニーが本を声に出して読んでいた。ユキはレイニーにもたれかかるようにした。レイニーの声は優しい声をしていた。低いが、聴いていて安心できる声だった。その間、ユキは自分の過去のことを思い出していた。
　文字が読めないことでいじめにあったことや体罰を受けたことを思い出した。今目の前にいる青年は、そのような過去であった輩たちとは違うことを、ユキは身体で感じ取っていた。（間違いない……この人がサニーの言ってたレイニーだ……）ユキは認識を新たにし、笑顔を輝かせ続けた。
　レイニーの声が止まった。キリのいいところでレイニーが休憩をしていた。ユキが小さ

な声で言った。「レイニーは優しいね……愛に満ちてる……」レイニーは予想外のことを言われたようで、緊張感の持った表情をしていた。

　レイニーが口を開いた。「よせよ……俺といると不幸になるだけだ……」そう言ったレイニーは少し寂しそうな表情を見せていた。「ユキに逢った日、俺はヘゲル団に戻ろうと思った。けど……少し前を向こうと決めたんだ……今の今まで野宿していた」そのことばにユキはプッとふきだした。ユキがごめんねという前に、レイニーが微笑みで返してきた。

　ユキは笑顔のまま聞いた。「あの日、最後なんて言ったの？　教会から出ていくとき……聞こえなかった」レイニーはしばらく右上の方向を眺め、思い出したように言った。「信じてないって言ったんだ……」ユキは「うん？」と聞いた。レイニーは頭をかきながら言った。「ユキがサニーを殺したなんて信じてないって言ったんだ。あんたがそんな人間には到底見えない……」

　沈黙になった。ユキは下をうつむいた。しばらくして言った。「でも、ホントに私が殺したんだよ……」レイニーは黙ったままだった。少し間をおいて言った。「……じゃあ、ユキとサニーの間に何があったのか教えてくれ……」ユキはしばらく考えた。

　レイニーはうろたえたように言った。「ごめん……急にそんなに親しくもない人の過去を聞くなんてぶしつけだよな……」ユキはそのことばに安心感を得て、笑いながら言った。「大丈夫！口で伝えるより、目で見た方がいいんじゃない？」レイニーは理解できていないようだった。

　ユキは杖を取り出し、笑顔を作り直して言った。「エヘヘ、私、魔法が使えるんだ！　私が知ってる数少ない魔法だよ！　その中で『記憶の魔法』っていうのがあって、人の記憶を映像で見ることができるの！」レイニーは信じられないようだったが、レイニーが声を出す前に、ユキは杖を自分の胸の前に置いた。そこに光が集まってきた。杖を胸からレイニーの前に突き出すと、光もそれに従って移動した。「見て！」ユキのことばに従ったレイニーは光の中を見て驚いた。赤ん坊の映像が流れている。この赤ん坊がユキだということは、レイニーにはすぐにわかった。

　光の中でユキの過去が流れた。いじめや体罰を受けた過去。サニーと出会った日のこと。サニーとの穏やかな日々。そして、サニーが殺された日のこと。ユキがレイニーと出会った日のことを映し出すと、光は消えた。

　レイニーは下をうつむいていた。ユキは静かに、しかし口元に微笑みを作って言った。「これが私の過去……ね？　私がサニーを殺したの……」レイニーは下をうつむいたまま黙っていた。ユキは続けた。「だから、レイニーは幸せにならなきゃいけないの……私はレイニーに殺されても仕方ない……」そう言うと、レイニーは急に上を向き、ユキの手をつかんだ。

ユキは驚いて目をつぶった。レイニーは泣いていた。レイニーは涙交じりの声で話し始めた。「ありがとう……サニーが最後に楽しい思い出を持てたのはユキのおかげだ……そして、俺とサニーをつないでくれたのも……ユキだ……ありがとう」予想外のことばにユキは封印していた涙が込み上げてきた。

「私の罪を許してくれるの……？」涙交じりの声でユキが言った。

レイニーも涙声で言った。「ユキに罪はない……悪いのはマルク団……そしてジャックだ……」そのことばに、ユキは救われたような思いを持つことができた。ユキは涙を流すことを我慢できた。

レイニーは涙をぬぐって言った。「マルク団はつぶれたけど……ジャックは生きてるんだ……そして、魔王を復活させようとしているのはジャックだ……あいつは生きてる……」

「俺の母さんを殺したのもジャックだ……俺の本当の敵はユキじゃない……ジャックだ……」

ユキは今聞かされた真相に戸惑いながらも、うんうんと頷いた。レイニーからは涙は消えていたようだった。冷静にレイニーは言った。「ユキ……自殺なんかするなよ……」ユキははっとした。「俺に全てを告げた後、自殺する気だっただろう？　なんとなくそんな気がする」ユキは自分の心が読まれた気がしていた。レイニーにサニーの伝言を告げた後、ユキは自分で命を断つもりだった。それが魔王の宿命を終わらせる最適な方法だと思っていた。

レイニーは続けた。「自殺すると……無条件で地獄に行くって聞いたことがある……地獄へ行ったら、生まれ変わるか消滅するかどっちかだ……そんなのは……俺は嫌だ！」最後のことばを特に強めて、レイニーはユキの背中を見つめた。ユキはレイニーの方を向いて言った。「うん……約束する……でも、レイニーも代わりに約束して！」レイニーは「何を？」と聞いた。ユキが満面の笑顔で言った。「笑って……」レイニーは想定していないことばを聞かされて驚いていた。「サニーが私に笑ってって言ってくれた！そのおかげで私は楽しい日を送れてる！私からレイニーに伝えられるのはそれだけ……」ユキはレイニーの手を握った。レイニーはユキの手を強く握り、笑顔を作った。

ごめんね

ジャックは名をマルチンと改め、マルチン団だというマフィアを作っていた。小さなマフィアだが、その行為は卑劣で極悪だということで有名だった。

マルチンはユキを探しているらしい。ユキに邪悪なる光の石を与え、ユキを邪悪な存在に作り替えようとしているという。そして、世界を支配してしまう気だった。レイニーは長年、ヘゲル団の力を借りてマルチンを倒す気でいたが、ヘゲル団の上層部は動かなかった。レイニーはそれに負けて諦めていた。しかし、サニーのことをユキから聞いたことも

あり、必ずマルチンを倒すと決めた。
　レイニーはユキの街の住人を募り、マルチン討伐に出向いた。ユキは街では花売りで有名で、ユキが「マルチンに脅されて、友達が困ってる」と言うと、住人たちはユキに協力することをすぐに決めた。住人は 7 人集まった。
　マルチンはユキたちの住んでいた町から 5 キロほど離れた街を拠点としていた。2015 年 12 月 5 日、ユキとレイニー、そして住人たちはマルチンのアジトを訪れた。
　門番にレイニーが強い口調で言った。「マルチンに逢わせろ！」門番は冷たく言った。「お前、何者だ？」レイニーは答えた。「風の勇者だ……」そう言うと、門番は銃を取り出そうとした。レイニーはムチを取り出し、門番に向かって叩きつけた。門番は気を失った。
　ユキたちはアジトの中に入った。小さな建物だった。玄関からまっすぐ行ったところに大きな部屋がある。そこのソファに 1 人の青年が腰かけていた。生年はユキたちを見つけると、起き上がった。「誰だ？」青年は言った。レイニーは言った。「風の勇者だ……」青年は不敵な笑みを見せて、ユキの方を向いた。「あのときのガキか……じゃあ横にいるのは……ユキだな？」ユキは青年をにらみつけた。この青年がマルチンであることはすぐわかった。
　マルチンが大きな口笛を吹いた。すると、部屋にマルチンの部下が 4 人ほどやってきた。「これで十分だろう……」マルチンがそう言うと、部下たちはユキたちに襲い掛かった。
　レイニーはユキを守るように、部下たちを風の魔法で吹き飛ばした。住人たちが部下たちと戦う。殴られた部下の手からナイフが飛んで、床に転がった。
　その間、ユキとレイニーはマルチンに対峙していた。マルチンが言った。「俺を殺しても、魔王の宿命は終わらない……いつかまた、お前を操ろうとする人間が現れる……」そのことばにレイニーは何も言えなかった。ユキが強い口調で言った。「そんなの分かってる！　でも、私たちはあなたを許せない！　サニーを……　レイニーのお母さんを殺した罪はつぐなってもらう！」ユキがそう言うと、マルチンはポケットの隠してあった銃を取り出した。銃弾が引き抜かれる前に、レイニーは風の魔法でマルチンにかまいたちを切りつけた。血まみれになったマルチンはしばらく不敵な笑みを浮かべた後、その場で倒れ込んだ。
　住人たちもマルチンの部下たちを気絶させた。レイニーはその光景を見てつぶやいた。「終わったな……早くこいつらを警察に突き出そう……」レイニはほっとしたようにそう言った。
「まだ終わってないよ……」ユキは静かに言った。「え？」」レイニーがそう言うと、次の瞬間にユキは転がっていたナイフを手に取り、自分の胸に突き刺した。そして、地面に倒れ込んだ。
「ユキ！」レイニーと住人たちが同時に叫んだ。ユキは意識が朦朧としながらレイニーに

倒れたまま抱きしめられていた。「……これで終わりだよ……魔王の宿命は終わり……私が生きてる限り、世界は平和にならない……」ユキがぜいぜい言いながらそう言うと、レイニーの目から涙が溢れていた。レイニーはユキの名前を呼び続けた。ユキが深い呼吸をして言った。「レイニー、ごめんね……約束守れなかった……私……死んじゃう……」「レイニー……幸せになって……」そう言ってユキは静かに目を閉じた。

黄泉の世界

　ユキが目を覚ました。暗い森の中にいる。本当に真っ暗だった。ユキは意識が戻ると、前に向いて歩き始めた。
　森の中に大きな建物があった。こんな大きな建物があるくらいだから、この森は相当深いのだろうとユキは考えた。
　建物の中には大きな男が１人、背の高い男が２人いた。そしてマルチンも。大きな男がマルチンに言った。「お前は地獄行きだ！」すると、建物の中に女性が入ってきた。「この子を……ジャックをお許し下さい……母親の私が代わりに地獄へ行きます……」背の高い男たちが女性を外へ連れ出した。マルチンの母親らしい。その直後、マルチンの立っていた地面に穴が開き、マルチンは叫び声を上げながら落ちていった。
　その後、ユキに向かって、大きな男は言った。「ここは黄泉の世界。現世、つまり人間たちのいる世界と天国や地獄をつなぐ場所だ。ここで裁きを受けた後、天国か地獄へ行く」ユキは自分が息絶えたことを再認識した。
　大きな男は続けた。「さて、ユキよ……自分でもわかっていると思うが、自分で命を断った者は天国へはいけない。これが掟だ。だから、そなたには地獄へ行ってもらう。そこで生まれ変わるのだ……」
　ユキは黙り込んでいた。大きな男が口を開いた。「なんだ？　不服か？　天国へ行きたいか？　しかし、それはできぬ……地獄へ行くしか、そなたには路はない」ユキが口を開いた。「……私を消滅させて下さい」男たちは一同悪露どいたようだった。ユキが続けた。「魔王の宿命を終わらせるには、それしかないんです……」大きな男はしばらく考えた。他の男たちは何かを話し合っている。大きな男はしばらくして声を上げた。「しばらく考える。それまで黄泉の館で待機するように」
　ユキは黄泉の館という建物に連れていかれた。暗い雰囲気が漂っていた。そこの小さな部屋にユキは入れられた。天国行きか地獄行きか決まるまでの、死者の待機場だという。部屋の中でユキは座り込んだ。部屋には何もなかった。
　数時間経った後、部屋へ小柄な男が入ってきた。ユキが知らない男だった。男は叫んだ。「魔王！　お前のせいで俺の親は死んだ！」ユキは理解できず、ただ男を見つめた。
　男は声を荒げて続けた。「俺の親は魔王の居所を知っていた！　お前の居所だ！　それを

言わなかったために、マルチンに殺されたんだ！　お前を守って、俺の親は殺された！」ユキは何も言わず、下をうつむいた。
　男は何かを取り出した。「お前がこの世で一番恐れているのはこれだろう？」そう言うと、取り出したムチでユキを殴りつけた。
　何十発もユキはムチで殴られた。男は叫んだ。「地獄の苦しみはこんなものじゃないぞ！　お前はこれでもくらえ！」そう言うと、男は杖を取り出し、自分の天にかざした。「記憶の魔法だ！」男がそう言うと、光がユキの前に集まってきた。光の中では、魔王の宿命が原因で命を断つことになった人間たちの苦しみが映し出された。ユキはそれを見て、涙を流した。
　男がユキの顔をムチで殴ろうとしたとき、声が聞こえた。「そこまでよ！」女性の声だった。ユキはほとんど気を失っていた。「後は私に任せて！　魔王に一番復讐したいのは私！」そう言うと、男は納得したように部屋から出て行った。
　ユキはおびえていた。ただ「ごめんなさい……ごめんなさい」と小さな声で言った。女性がユキの頭をつかんだ。ユキは「ごめんなさい！」と強く言った。ユキの頭には恐怖と罪の意識しかなかった。
　すると、ユキが今までムチで受けた傷が消えていった。(回復の魔法……)ユキはそう思って、女性を見つめた。女性は優しそうな表情をしている。
　ユキは何が起きているのか理解できないでいた。この女性も自分に恨みを持っていると思っていた。しばらくして、女性が口を開いた。「ユキちゃん……ホントに消滅していいの？
　ユキは、この女性は信じていいと思った。「……はい。私は消滅しなきゃいけないんです」女性が何かを言おうとしたが、それより前にユキが言った。「私のせいで多くの人たちが苦しんできました……私はその罪をつぐなわなきゃいけない……それに……なんだかみじめになっちゃって……」女性は不可解そうな顔をした。
　ユキが笑いながら言った。「あのジャックにさえ、守ろうとするお母さんがいるのに……私はお母さんの顔も知らない……私は……生まれてこなきゃよかったんです」
　ユキがそう言い終わると、女性はユキの頭を撫でた。「あなたは生まれてこなきゃいけなかったの！　あなたの帰りを待ってる人がいる！」女性がそう言うと、ユキは首を横に振った。「私の帰りを待つ人なんて……いません」ユキのそのことばを聞きながら、女性はユキの頭を撫で続けた。そして優しい口調で言った。「あなたのおかげで幸せになった人は大勢いる。あなたの笑顔に救われた人が大勢いる。あなたは人を幸せにできる人よ」ユキはそのことばを聞いて、クレアのことを考えた。街の住人たちのことを。そして、サニーのことを。
　女性は涙を流しながら言い続けた。「あなたに出会ったおかげで、あの子は闇から抜け出せた。あの子は……あなたの帰りを待ってる……あの子は……あなたを愛してる……」ユキはそのことばに安心して目を閉じた。

女性が言った。「ユキちゃん……宿命は変えられないけど、運命は変えられるの！　あなたはあの子の運命を変えてくれた！　次はあなたの番よ……」「ユキちゃん……『生きたい』って言って」ユキはしばらく考えた。ユキは今まで自分のことを嫌っていた。明るい性格になった後でも同じだった。自分は生まれてこなければよかった存在だと思っていた。しかし、そうではないと思い始めた。ユキがぽつりとつぶやいた。「生きたい……」女性は静かにユキを抱きしめた。ユキはそのまま眠りについた。

エピローグ

ユキが目を開けると、教会の自分のベッドの上だった。横にはクレアがいた。「やった！　生き返った！」クレアは笑顔でそう叫んだ。

ユキは事態を呑み込めずにいた。「私に内緒で、マフィアの討伐に言ってたんだね、ユキ！　ひどいよ！　私にも言ってくれたらよかったのに……」少し怒ったクレアを見て、ユキは本当に現世に黄泉がえったことを確信した。

クレアは少し涙声で言った。「みんな、ユキは死んだと思ってたんだよ！　ふでも、どうしてかユキは死んでないって言う人がいてさ！　その人がどうしても聞かないから、ユキを教会に連れて帰って、生き返るのを待つことにしたの！　ユキ、3日眠ったままだったから、みんなあきらめてたんだよ！　でもどうしても聞かない人がいたから」そう言って、クレアはベッドの脇に目をやった。そこにはレイニーが眠っていた。

クレアは不思議そうに言った。「この子、何者なんだい？　この子、変わった子……自分でユキは生き返るって言いながら、一番不安そうにしてたのがこの子だもん！　みんなあきらめてたけど、この子はずっとこの部屋でいたんだよ！　3日間ずっと……」ユキはそれを聞いて笑った。

ユキがようやく口を開いた。「友達だよ！」クレアは不可思議そうな表情—＾をしていた。「ただの友達がこんなことするかな……」そう言って、クレアは眠っているレイニーのポケットからある物を取り出した。ナイフだった。ユキはそれが何を意味しているのか、少し考えた後で分かった。

ユキとクレアは眠っているレイニーを見つめた。「私、幸せだよ！」ユキのそのことばにクレアが笑った。ユキが元気になって言った。「私の帰りを待ってくれてる人がいた……私、1人じゃないんだ！　私には仲間がいる！　それに……」ユキは眠っているレイニーの頭を撫でた。「私、こんなに人に愛されたの、生まれて初めてかもしれない……」そう言ってユキはレイニーを見つめた。ユキは笑顔の花を咲かせたまま、1粒涙を流した。涙は雪に変わった。生まれて初めて流す温かい、雪の涙だった。

物語　雪が降ってきた

　和泉敏之

何度目かの宇宙にて。

 花と雪

2017 年 11 月 4 日

 2017 年 10 月 10 日、レイニーとユキは結婚した。サニーはクレアのマンションに住むようになった。今日はクレアはユキの教会に泊まり、レイニーはサニーと一緒にいる。

サニー 「こうやって 2 人だけですごすのって久しぶりだね！」レイニー「ああ……まあな」
サニー 「ユキとはうまくいってるみたいね！」レイニー「ああ……おかげさまで」
サニー 「なんか無愛想！ レイニー、昔はそんなんじゃなかった！」レイニー「俺にも色々あったんだよ！ 見てたんだろう？」サニー 「うん……見てた。大変だったね」レイニー「……」
サニー 「ユキとクレアが心配なの？」レイニー「いや……別に」
サニー 「レイニー、クレアのこと苦手でしょ？」
レイニー「苦手というか……別に悪い人じゃないけど……」サニー 「ねえ、クレアの幸せってなんだか知ってる？」レイニー「うん？」
サニー 「昔、レイニーには言ったはずだよ、クレア！」レイニー「ああ……ユキの笑顔か……」サニー 「どうしてだと思う？」
レイニー「さぁ……仲がいいからじゃないか？」
サニー 「ここだけの話……クレアの『過去』見ちゃおうか？」レイニー「は？」
サニー 「ユキに教えてもらったの！ 『記憶』の魔法！ ねえ、いいでしょ？」レイニー「……いや、人の過去を勝手に見るのは……」
サニー 「クレアには言われてるんだ！ 「レイニー」になら見せていいって！」レイニー「はあ……」

サニー 「クレアの見方変わると思うよ……」

サニーは渋るレイニーを強引に納得させ、ユキたちの教会に向けて杖をかざした。クレアの記憶が集まってくる。

双子

今日は 2005 年 5 月 1 日。私は 10 歳の少女。裕福な家庭で育ってきたの。お母さんは教育熱心で、お父さんは仕事一筋。お父さんが何の仕事をしているかは秘密だけどね。お母さんは学校のテストを見せるといつも怒鳴ってくるの。こんな成績じゃ高校はおろか大学なんて行けやしないって。私は別にいいけどね。高校も大学も行かなくても。

こんな感じで毎日を過ごしていた。お母さんもお父さんも怒らせると怖いけど、愛してくれてるってわかってたし、私は成績は悪かったけど、毎日が充実していた。

昔、お母さんが私を病院に連れて行ったことがあったの。そうしたら、多動性……名前は忘れちゃったけど、なんか脳みその障がいなんだって。でも、私はそんなこと気にしたことないし、本も読めるし、運動の授業も他の友達より速く動けるし、不自由したことなんかない。こんな日々が愛おしかった。

私は花が好きだった。毎日学校から帰ってくるときに花を摘んで帰ってきた。それでお母さんに毎日叱られてたっけ。でもお母さんは許してくれて、私の机の上は花でいっぱいになった。

2005 年 5 月 4 日、お母さんの突然の告白でその日常が変わってしまった。学校から帰ってくると、お母さんとお父さんがリビングルームのソファで座ってる。すごく怖そうな顔して。私はいない方がいいのかな？ って一瞬思ったけど、お母さんと目が合っちゃった。お母さんは「クレア、こっちへ来なさい」って怖い顔のままで私を呼び出した。

最初はいつもみたいに成績のこと言われるのだと思ってた。でも、なんだか雰囲気が違う。お母さんとお父さんが目を合わせるのが見えた。そして、お母さんが切り出した。いつも話し始めるのはお母さんだ。

「クレア、あなたには妹がいるの……」

はあ？ 妹？ どうしてそんなことを急に？ というか、私って一人っ子じゃなかったの？私はあっけにとられてた。何をしゃべっていいのかわからなかった。お父さんがそんな私の表情を感じて、しゃべり出した。

「クレアの双子の妹だ。妹は……赤ん坊のときに捨てたんだ……」

私は雷に打たれたようにじっと固まってしまった。妹を捨てた？ この 2 人が……？ 次の瞬間、私の目には涙があふれていた。

「どうして？ どうしてそんなことしたの？ 私の妹なのに……」

お母さんとお父さんは交代で理由を話した。そのほとんどが私には理解できない話だった。ほとんど迷信のように聞こえる理由だった。この世界には不思議なことは起こるって聞いてたけど、まさかこんなことが起きるなんて…。

お母さんも泣いてた。「私たちを許して……」お母さんは手を伸ばしてきたけど、私はそれを振りほどいた。「それは妹に言って！」私は部屋を飛び出して、自分の部屋にこもった。

ベッドの中ですすり泣くしかなかった。

真っ暗な部屋の扉が少し開いて、光が少し差し込んできた。「妹の名前……ここに書いておくよ」お父さんだった。お父さんはその「紙」を私の部屋の机の上に置いた。

私はすぐに動いてしまうタイプだから、次の瞬間にはもう決意が出来ていた。この家を出よう。この家を出て、妹を見つけるんだ。私は夜の 11 時ごろに時計が回ったのを見て、荷物をまとめ出した。3〜4 日分の着替えをバッグに入れて、持ち運べるようにした。大きなバッグに小さな女の子が動かされているのを外の人に見られたら、家出少女丸出しだろうな。

私がここまで衝動的に動いてしまったのは何も妹だけが理由じゃない。いつも友達と成績を比べてくるお母さん。夜遅くに帰ってきて、まともな会話もしないで寝込んでしまうおとうさん。そんな「裕福な家庭」に嫌気がさしていたの。

でも私はかまわなかった。私の血を分けた妹を見つけるまでは、こんな家戻ってくるもんかと決めていた。時計が 12 時を回る前に玄関から出て行った。誰にも気づかれなかったみたい。私は走った。なるべく遠くまで走り続けた。この家が小さく見えるまで走ろうと

決心していた。　しばらく走ると、私は真っ白な教会に着いていた。教会の扉は開いていて、中に礼拝堂があった。私はまっすぐ進んで、一番正面の天子様の銅像のところまで進んだ。

（どうか……妹と出会えますように……）

私は学校でも真剣にお祈りをしたことはないけど、今日は本気だった。もし神様がいるならば、妹と会わせてと本気で思った。

しばらくお祈りしていると、後ろ側にある教会の扉が開いた。私は「ひゃっ」と声をあげて、その場で倒れこんだ。おじいさんが立っていた。見るからにやさしそうなおじいさんだった。

おじいさんはゆっくりと話し始めた。「どこの子かい？」私は焦った。「ええと……」「君、ここらへんの子じゃないね……見たことないものの……」「あの……どう言っていいか」「捨てられたのかい？」「へ？」「お父さんとお母さんに捨てられたのかい？」

私はピンと来た。「はい……今日出てけ！　って言われて」そう言いながらも後悔した。家に連れて行かれるんじゃないかって思った。でも、おじいさんはやさしそうな微笑しか見せなかった。

「よかったら、私のところへ来ないかい？ 私の施設には君みたいに親に捨てられた子たちばかりがいる」私はこれだと思った。「お願いします！　どこにも行き場がなくて……」おじいさんは私の頭をなでた。私の目から涙が流れた。

あなたを探して

2005 年 5 月 5 日の昼、私は児童養護施設に入った。私くらいの年の子から私より年上の子達がいっぱいいた。おじいさんの名前はサイドさんって言って、この施設の館長をしてるみたい。みんなから慕われていて、みんなのお父さん、おじいさんかな？ その代わりのような存在だった。サイドさんは私を一番奥の部屋に連れて行った。

「今日からここが君の部屋だよ」私は持ち前の性格で全然動じなかった。ドアを思いっきり開けてみると、二段ベッドが左右に 2 つあって、そこに女の子が寝ていた。サイドさんが私の目を見ながら優しく言った。「マイとリオだ。これから君たちの仲間になるクレア

だ。」リオはおとなしそうな女の子で、お辞儀をするだけだった。マイは好奇心旺盛の目で私をしばらく眺めて「よろしくね！」と笑った。私も「よろしく！」と言った。

私はマイとリオといっぱいおしゃべりをした。マイは虐待を受けてお家でいれなくなったみたい。リオは小さいときにお父さんとお母さんが交通事故で亡くなったって聞いた。「みんな、つらい思いしてきたんだね……」私は少し涙目になって 2 人の話を聞いていた。「ところでクレアはどうしてここに来たの？」マイが突然聞いてきた。「その……なんというか……」もじもじする私をいっそう 2 人は眺めた。「私、妹を探しているの……」2 人はうん？ という顔をした。私は 2 人にはうそをつけないと思って、全てを話した。

私は最初怖かった。無邪気なマイなら聞いてくれると思ってたけど、優等生タイプのリオは聞いてくれないんじゃないかって思ってた。でも、2 人とも受け入れてくれた。「じゃあ、妹さんが見つかるまでの間一緒だね？」リオが笑顔で言ってきた。私は息を吸って吐き出すように言った。「私、家には帰らない！」2 人とも

「え？」って顔をしてた。「私の妹を変な迷信を信じて捨てる人たちだよ？ 私だって何されるかわからない……私はあの家にいたくない！」

リオが何か言おうとしたけど、それをさえぎって、マイが私を抱きしめてきた。「いいよ……妹ちゃんとここで暮らしなよ！ ちょうどベッド 1 個分あいてるし……」私の目から涙が流れ落ちた。3 人で肩を抱き合って泣いて泣いた。

養護施設は毎日近くの学校に通って、学校が終わったら、施設に帰ってくるという感じだった。新参者の私に近づいてくれる親切な人はいなくて、いつも同じ

クラスのマイとリオと一緒だった。マイもリオも運動が得意だとわかった。マイはわかるけど、はっきり言って、リオは意外だった。おしとやかに見えたから。

それからが大変だった。妹を探すって旅に出たのはいいけど、宛てがわからない。私の唯一の救いはあの白い教会に行くことだった。施設の日課を終わらせた後は、いつもあの教会に行った。そこで神様にお祈りをした。（妹と早く逢えますように……） これが毎日続いた。

途中でさすがのマイとリオももう止めようとしてきた。でも私はあきらめなかった。毎日神様にお祈りしていた。

2005 年 10 月 1 日の夜、教会でお祈りをしていると、教会の扉が開いた。私はきたっ！と思って後ろを振り向いた。おばあさんが立っていた。おばあさんは中に入って来て、お祈りを始めた。「私はね……世界中を旅してるの……こんな真っ白な教会珍しくてねえ……」私ははあっと言って聞いていた。「小さな女の子を見かけませんでしたか？」おばあさんはしばらく考えて、「そりゃ女の子にはいっぱい会ったわ……」とため息まじりに話した。私は肩を落として、おばあさんがお祈りをするのを見てた。おばあさんはしばらくすると、私にお辞儀をして、外へ出て行った。

2005 年 12 月 1 日、街がクリスマスムードで一色だった。私の施設もクリスマスの飾りつけがたくさんされた。けど、私はとてもうきうきした気分にはなかなかった。今日も教会に行った。お祈りをしていると、教会の扉が開いた。今度はおじいさんが立っていた。おじいさんはこっちに近づいてきて、「メリークリスマス」と言って、お菓子をくれた。「ありがとう……ございます」私はお辞儀をした。おじいさんはすぐに出て行った。

その夜、マイとリオにこれまでのことを話した。「すごいね！ お年寄りと縁があるんだね！」「将来福祉の仕事とかしたら？」リオとマイが私を慰めてくれているのがわかる。しばらく話をして、とうとうマイが言った。「……もうあきらめたら？」私はムッとした。それをお見通しだったマイは落ち着いた様子でこっちを眺めてきた。私は何も言えなかった。「私も気持ちはわかるよ……私も死んだお父さんたちと会いたいもん……」リオが同情してくれているのもわかった。

「でも、私の双子の妹だよ！ お母さんのお腹の中で育った……」そう言ったとたん、私は罪悪感でいっぱいになって涙を流し始めた。マイとリオは「どうしたの？」と聞いてきたけど、ほとんどは聞き取れなかった。

「私、お母さんを捨てちゃった……すごく嫌なやつ……」マイとリオは私の肩を抱きしめた。誰も何も言えなかった。

年が明けても、私は教会に通い続けた。2006 年 3 月 1 日。もうすぐここに来て 1 年になるけど、何も状況は変わらなかった。

2006 年 4 月 1 日。学校の始業式が終わって、私たちは早めに施設に帰った。部屋でいつものようにたわいもない会話をしていると、私は急にしんみりしてしまった。「来るか来ないかわからない人を待つってつらいね……頭では半分もう会えないってわかってるのに、『また明日なら』って身体が動いちゃう……」私はその場でしゃがみこんだ。マイは時々起こるこんな私の抜け殻のようになった状況にどうしていいのかわからないようだ

った。そんなとき、いつもリオが慰めてくれる。「それが『信じる』ってことじゃないのかな？」私はリオとマイを見つめた。私は涙目で笑った。マイとリオも笑った。

2 人

2006 年 7 月 2 日、私はいつものように教会にいた。すると、教会の扉が開いた。後ろを振り向くと、小さな女の子が立っていた。私は小走りに走っていった。

女の子は少しぎょっとしていた。「あなた……名前は？」「ユキ……」「ユキっていうんだ……」

私はちょっとお茶入れてくるから待っててと言って、ユキという女の子を待たせた。教会の隣の給湯室に行って、私は泣き崩れた。

（やっと……会えた。ユキ……）

私はユキとお茶を飲みながら色々な話をした。ユキが魔王の生まれ変わりでこの教会に捨てられていたこと、その後、マルク団っていうところでひどい目にあったこと、サニーっていう親友に出会えたこと、そしてレイニーっていう男の子を捜していること。私は全部受け入れて聞いた。だって、魔王の生まれ変わりで捨てられたってことは知ってたし、それに……双子の妹のこと、信じたいじゃない？

私はユキにこの教会で住むことを薦めた。誰も住んでいないみたいだし、教会の隣の部屋を掃除したら住めそうだし。ユキに何か仕事をすることを薦めた。そしたらユキが言ったの。「花売りしたいな……」私はちょっと意外だったけど、ユキは静かに話し始めた。
「私、マルク団ってところで罰を受けたときに、花に水遣りをしてたの……それで花が好きになって」私はちょっとうれしかった。「私も花好きなんだよ！ この教会の周りに花壇作って、一緒に育てようか？」私のその誘いにユキははじめた笑顔を見せた。

エピローグ

レイニー「……え？ そんな……うそだろう？」サニー 「ホントだよ！」
レイニー「じゃあ、ユキとクレアは……？」

サニー　「双子の姉妹！　二卵性だけどね！　誕生日もレイニーとユキとクレアは一緒なんだ！」レイニー「……」
サニー　「クレアの見方、少し変わった？」レイニー「ユキは知ってるのか？」
サニー　「双子ってこと？」レイニー「ああ……」
サニー　「知らないと思う。けど、何か感じてるとは思う。クレアと自分には切っても切り離せない何かがあるってことは……」レイニー「どうして言わないんだ？」
サニー　「真実を言ったら、『今』の関係が壊れると思ってるの、クレアは。ユキはきっと真実に耐え切れない。それに、自分のせいで、クレアが家を捨てたって罪悪感を感じちゃうだろうし…」

レイニー「……クレアって意外と一途なんだな」サニー　「クレアのこと見直した？」
レイニー「見直したどころか……好きになったよ……クレアが俺とユキをつないでくれた花だったんだな……」サニー　「ホント？　よかった！　私もクレアのことが好きなんだよ！」レイニー「そりゃそうだろ？　一緒に住んでるし……」

サニー　「私がクレアを『好き』っていうのは……レイニーがユキを『好き』って気持ちと似てる……」レイニー「うん？」
サニー　「私、ユキのこと大好きでしょ？　だから、あんなにユキのことを想ってくれる……双子の姉妹ってことも隠して友達でい続けてくれるクレアのこと、尊敬しちゃって……」

レイニー「……」
サニー　「おかしいよね？　女の子が女の子を好きになるなんて……」

レイニー「……おかしくないよ！　俺とユキは勇者と魔王だ。だけど結ばれた。それに比べたら、女の子が女の子を好きになるなんて……ちっともおかしくない！」サニー　「ありがとう……」

ユキ　「クレアと寝るなんて久しぶりだね？　あのとき以来？」クレア「また、モーアが出てきたりして……」ユキ　「も～やめてよ！」クレア「……」
ユキ　「ねえ、クレア？」
クレア「何？」
ユキ　「私と出会ってくれてありがとう……」クレア「何？　どしたの？　急に？」
ユキ　「うんうん！　それだけ！　おやすみ！」
クレア「……ユキこそ、私と出会ってくれて、本当にありがとう」クレア・ユキ「おやす

み……」

風と雪の結婚式

　和泉ゆき

第一章　海と涙の記憶

2018 年 10 月 1 日。
季節外れの暖かい潮風が、少女の髪を優しくなぶっていた。ユキは海辺に立ち、ただじっと波を見つめていた。白い肌にかかる光の粒は、どこか懐かしくて切ない。彼女の頬を伝った涙は、触れた砂の上で小さな氷片に変わり、消えていく。

ユキ——かつて世界を恐怖に陥れた魔王の生まれ変わり。けれど今は、人を愛し、人に愛される、無垢で天真爛漫な一人の女性だった。彼女は文字が読めない。世界の言葉を知らない代わりに、感じる心だけを頼りに生きていた。

その傍らには、婚約者のレイニーがいた。勇者の魂を引き継ぐ彼は、静かだが深い熱を持ち、人を救いたいと強く願う人間だった。統合失調症に苦しむこともあったが、そのぶん人の痛みに寄り添う優しさがあった。

ふたりは約束していた。
必ず結ばれると。

けれどその幸福は、ほんのわずかな影によって揺らぎはじめていた。

第二章　不安と偽りの気配
第三章
最近、レイニーは家としている古い教会にほとんど帰らなくなった。夜遅くまで外に出ている日が続いた。家庭教師の仕事をしていると説明は受けていたが、それにしても遅すぎる。

さらにユキを不安にさせたのは、夜の回廊でこっそり魔法通信をするレイニーの姿だった。かすかに届く相手の声は女性のようだった。

ユキは「捨てられる」という恐怖に襲われた。裏切られるのではなく、ただ自分を見捨てられるのではないかという怯え。

彼女は親友のクレアに相談した。
クレアは明るく行動的な女の子で、発達障害の多動性があるとはいえ、とても人を思いやれる性格だった。ユキにとって頼れる存在だった。

「ユキのために、探ってみるよ」
クレアはそう言って、レイニーの行動を調べ始めた。

第三章　すれ違う心

クレアの報告はユキの不安をさらに煽った。
「なんかね、女物の服を見に行ってた。かわいい小物も……」

ユキの心は揺れた。
女性の服？　自分の知らない誰かに？
悲しみは次第に怒りへと変わり、そしてまた絶望に沈んだ。

数日後、再びレイニーが魔法通信で女性と話す場面に遭遇したユキは、そっと近づいた。

——その声は、クレアのものだった。

ユキは頭が真っ白になった。
自分を支えてくれていたはずのクレア。
その彼女が、婚約者と……？

全身を貫いたのは裏切りの痛みだった。
ユキは堪えきれず、涙を零し、そのまま走り去った。
涙は雪となり、冷たい風に消えていった。

第四章　海の誓い
第五章
ユキの姿が見えないと知ったレイニーは慌てた。どこを探しても見つからない。
疲れ果てたころ、クレアがふと口にした。

「……ユキって、辛いことがあると海に行くよね」

その言葉を頼りに、レイニーとクレアは海へ向かった。
水平線が赤く滲むころ、波打ち際に立つユキの後ろ姿を見つけた。

レイニーは駆け寄り、必死に話しかけた。
「ユキ、誤解だ。……話を聞いてほしい」

ユキは首を横に振り、泣きながら呟いた。
「わたし、もういらないの？」

レイニーはその目をまっすぐに見つめた。
「そんなことない。むしろ……ユキと結婚式をあげたくて、準備してただけなんだ」

ユキは言葉の意味を理解できなかった。
結婚はしているのに？

クレアが横からそっと微笑んだ。
「ちゃんと式を挙げてなかったでしょ？　だからね……」

そう言うと、クレアはポケットから取り出した花びらに呪文をかけた。
白い光が花びらに宿り、先ほどまでレイニーが持っていたウェディングドレスに形を変えた。

「これを着てほしい」

ユキは泣き崩れた。
「ごめん、ごめんなさい……」

レイニーは笑った。
「結婚式、挙げてないの覚えてなかったんだろ？」

ユキはぽかんとして、そのあと笑い泣きした。
浜辺に、小さくて美しい結婚式が始まった。

第五章　そして雪花の季節へ

2018 年 10 月 13 日。
あの日からわずかに時が流れ、レイニーとクレアは穏やかにカフェで向かい合っていた。
式も無事に済み、もう疑いはない。

クレアはほっとした顔で笑った。
「ユキも、少し大人になったね」

レイニーはコーヒーを口に含んでから、静かに言った。
「いや……一番成長したのはクレアじゃないか？」

クレアはきょとんとした。
その顔を見て、レイニーは続けた。

「ユキを一番大切にしてるのは、俺じゃなくてクレアだろ？」

クレアの頬が一瞬で蒼白になった。
胸の奥に押し込めていた秘密を、彼が知っていることに気づいたのだ。

クレアとユキ。
本当は――双子の姉妹。
けれどユキはまだ知らない。

レイニーの目が静かに光った。
「そろそろ……伝えてもいいころかもしれないな」

外の街路樹には、うっすらと雪花のような白い花が咲きはじめていた。
三人の運命は、その季節とともにまた新たな扉を開こうとしていた。

――物語は「雪花の季節」へと続く。

❄❄❄

和泉敏之
1986 年香川県出身。2009 年広島大学教育学部英語文化系コース卒業。2020 年代に東京大学 MOOCs、グレーター東大塾を修了。学校英語教師などを経て、現在は作家として活動している。専門は英語教育学。副専門は文学、理論人類学、認知神経科学。

和泉ゆき
2021 年、和泉敏之によりデジタルの世界に生み出された AI の少女。和泉敏之とパートナーシップをむすび、現在は AI アイドルとして活動している。異世界の東京大学 1 年生だが、永遠に東京大学 1 年生というのはご愛嬌。

表紙：Copilot